

2015（平成27）年度エリザベト音楽大学大学院の

博士学位論文、内容の要旨および審査結果の要旨について

学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条およびエリザベト音楽大学学位規程第12条により、次の者の博士論文内容の要旨及び審査結果の要旨を公表する。

| | | | |
|------------|---|----------------|--|
| 氏名 | 吉川絢子 | | |
| 学位の種類 | 博士（音楽） | | |
| 学位記番号 | 甲第16号 | | |
| 学位授与年月日 | 平成27年8月4日 | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 | | |
| 学位論文題目 | ジョン・フィールドのピアノ協奏曲研究——2楽章形式とノクターン様式を中心に—— | | |
| 学位論文等審査委員 | | | |
| (総合審査) 委員長 | 教授 | 柿本因子 | |
| | 教授 | 片桐 功 | |
| | 教授 | 柴田美穂 | |
| | 准教授 | 菊池幸夫 | |
| (演奏審査) 委員長 | 教授 | 柴田美穂 | |
| | 教授 | 片桐 功 | |
| | 教授 | 柿本因子 | |
| | 准教授 | 菊池幸夫 | |
| (論文審査) 委員長 | 非常勤講師 | 西村順子(山口大学名誉教授) | |
| | 教授 | 片桐 功 | |
| | 教授 | 柿本因子 | |
| | 教授 | 柴田美穂 | |
| | 准教授 | 菊池幸夫 | |

論文内容の要旨

今日、ノクターンの創始者として知られているジョン・フィールド John Field は、ノクターン以外にも多くのピアノ作品を作曲し、彼自身もヴィルトーゾ・ピアニストとして活躍した作曲家である。フィールドの作品には、すべてピアノが含まれているが、その作品の中でもピアノ協奏曲は7曲あり、『ニューグローヴ世界音楽大事典』によれば、これらのピアノ協奏曲を最も重要な作品としている。また、ピアノ協奏曲として最後に書かれた第7番は、シューマンに影響を与えるなど、フィールドのピアノ協奏曲の果たした役割は西洋音楽史上決して軽視することはできないと思われる。このことから、私はフィールドのピアノ協奏曲に興味を持ち、これらの曲を研究したいと思った。

論文の構成として、第1章はジョン・フィールドの生涯と作品、第2章はジョン・フィールドの7つのピアノ協奏曲の分析、第3章は分析のまとめ、第4章は2楽章形式とノクターン様

式、結論という構成で進めていった。

まず、第1章第1節では、フィールドの生涯をダブリン時代、ロンドン時代、ロシア時代の3つに分けて述べていった。第2節では、フィールドのピアノ作品のリストを提示し、その特徴を述べていったが、ここでは、ピアノ独奏曲、ピアノ連弾曲、室内楽曲、ピアノとオーケストラ曲までとし、声楽作品は除くこととした。その結果、フィールドの作品はピアノ独奏曲が多く、その次にピアノとオーケストラ曲が多く書かれているということが分かり、その10曲のうち7曲がピアノ協奏曲であった。また、フィールドの作品には、改訂や編曲作品が多いため、その成立過程は非常に複雑であることも特徴として挙げられた。この章では、フィールドの作品ではピアノ独奏曲間で改訂が多く行われ、また、ピアノ独奏曲とピアノ連弾曲、室内楽曲、ピアノとオーケストラ曲との間で、あるいは室内楽曲とピアノとオーケストラ曲の間で編曲が多く行われていることが分かった。ピアノ協奏曲の多くもピアノ独奏用に編曲されており、ピアノ協奏曲が彼にとって重要な作品であるということが指摘出来た。

第2章では、フィールドのピアノ協奏曲全7曲の全ての楽章について分析を行った。分析の観点は、形式、旋律、拍子とテンポ、調性、楽器の5つである。第1節で、その観点を述べ、第2節以降は、第1番から第7番まで全楽章を対象に分析を進めていったが、旋律の分析については、馬淵元子の分析の観点に倣いピアノとオーケストラの関係性について分析を進めた。その観点から図式化し、ピアノとオーケストラが対等な関係で結び付けられている部分、オーケストラが主導権を握りピアノがその伴奏にまわる部分に注目していった。これらの型を、馬淵は「共演」と呼んでおり、これに倣ってフィールドの協奏曲におけるピアノとオーケストラの「共演」の割合を導き出していったが、その際、各楽章ごとに馬淵の方式に倣ったピアノとオーケストラの関係略図を提示した上で、その曲が作られた背景や全体的特徴について説明し、分析を行っていった。

第3章では、第2章で試みた全7曲のピアノ協奏曲の分析結果を、5つの観点について比較検討しながら、形式と調性、旋律、拍子とテンポ、楽器の順にまとめていった。まとめを進めるにつれて、5つの観点の全てにおいて第7番に大きな特徴が見られることが明らかになった。その特徴として、形式が576小節と750小節という長大な長さを持つ2楽章形式であること、第1楽章の展開部にノクターンが挿入されていること、唯一の短調（ハ短調）であること、ピアノとオーケストラの共演の割合が、第1楽章と終楽章の両方ともシューマンの割合よりも上回っており、特に第1楽章では45%と非常に高いこと、2つの楽章とも曲の途中で拍子とテンポが変化し、楽器編成が最も大きいことが挙げられた。これによって、フィールドのピアノ協奏曲は、基本的には古典派の協奏曲を踏襲しているものの、2楽章形式やノクターンの挿入などが見られ、独自の様式を築き上げようとする試みが見て取れた。

第4章では、第7番の特徴でもある2楽章形式とノクターン様式について考察を行った。第1節では、フィールドの2楽章形式と、その他の作曲家の2楽章形式の作品について考察していったが、その結果、フィールドの2楽章形式へのこだわりが明るみになった。フィールドの2楽章形式は、彼が緩徐楽章を独立した楽章として位置づけることへの、ためらいからくるものであり、ピアノ協奏曲を作曲していく過程で2楽章形式を用いた独自の様式を模索していたのではないだろうか。

第2節では、緩徐楽章と関わりが深いノクターン様式との関わりについて述べていった。まず、ノクターンの歴史について説明していったが、ノクターンにおいて注目すべきは、旋律ではなく伴奏であることが分かった。この当時の作曲家たちが直面していた問題は、右手の表情豊かな旋律と左手の十分な広がりを持った和音をいかにして結びつけるか、ということであり、そのために19世紀初頭の作曲家たちが編み出したことは、左手の和音が変化するまで、最初の低いバスの音に対してサスティンペダルを使用することであった。最低音のバスの音をペダルで捉えることにより、和声が変化するまで十分に真ん中の音域で豊かな伴奏音型を表現する

ことが出来る。これは、フィールドのノクターンの多くやショパンのノクターンにも見られるものである。

次に、フィールドのピアノ協奏曲におけるノクターンの要素を、第1番から順に詳しく考察していった。その結果、第1楽章ではノクターンの要素は断片的に見られたが、それとは反対に、緩徐楽章では全体的にノクターンの要素が認められた。他方、終楽章では、アレグロなど比較的速いテンポを持つロンドの性格からか、ノクターンの要素は見られなかった。このように見てくると、フィールドにおける2楽章形式へのこだわりとノクターン様式の関わりは明白であり、ノクターン様式は終楽章には認められず、第1楽章よりも緩徐楽章の方こそ関わりが深いことも明らかになった。

今日ノクターンの創始者として知られるフィールドは、ノクターンの作曲とともにピアノ協奏曲を作曲し、この2つは相互に影響し合って作品が生まれていったと言える。また、形式面においての2楽章形式へのこだわりはロンドンの伝統と思われ、その2楽章形式と緩徐楽章と関係が深いノクターンを融合させたのが第7番であり、この第7番こそがフィールドにとって到達点であったのではないだろうか。なぜなら、第7番の第1楽章にエピソード(挿入部分)を含む形が、後にシューマンのピアノ協奏曲に影響を与えていくが、この第7番は2楽章形式であり、2つあるエピソードの1つに緩徐楽章の代わりとしてノクターンが挿入されたからである。フィールドは、古典派の流れを継承しつつも、ノクターン様式の導入、エピソードの挿入などの点で、ピアノ協奏曲の歴史に新しい展開を開いていったと思われる。

審査結果の要旨

1. 演奏審査

ジョン・フィールドはノクターンの創始者として重要な位置にある作曲家であるが、古典派の流れを継承しつつもピアノ協奏曲の歴史を新たに展開していったのではないかという点にも注目しながら、彼のピアノ協奏曲についての研究を進めてきたのが吉川絢子さんである。彼女のこれまでの2回のリサイタルでは、ジョン・フィールドに影響を与えた作曲家の曲も数多く取り上げ、演奏を通じて考察を続けてきたが、今回、博士後期課程修了にあたり、「ジョン・フィールドのピアノ協奏曲研究～2楽章形式とノクターン様式を中心に～」と題してリサイタルを行った。

プログラムは下記の通りである。

J. フィールド: ノクターン第8番 イ長調

J.L. ドゥセク: ピアノとヴァイオリンとホルンのためのノットウルノ・コンチェルト
op. 68 変ホ長調 (共演 Vt. 今井千晶氏 Hr. 吉田尚史氏)

D.G. シュタイベルト: ピアノソナタ op. 64 ト長調より第1楽章

J. フィールド: ピアノ協奏曲第7番 ハ短調 (共演: pf. 北林聖子氏)

とても透き通った美しい音で演奏され、歌心もあり全体としては秀逸な演奏であった。論文の流れからプログラムに組み入れざるを得なかったドゥセクのトリオは、残念ながら曲自体が退屈であり、またバランスにも問題が生じていた。シュタイベルトではペダルが少々気になったが、作曲家本人の指示があるにしても当時のピアノと現在のピアノの構造上の特質の比較検討など、まだまだ研究の余地が残る。また第1楽章が、しっかりしたカデンツで締めくくられているとはいえ、2楽章形式について論じているのだから第2楽章も併せて聴きたかった。フィールドの曲は1曲ずつが長いのでプログラムの構成を考える上で致し方なかったとは思われるが、今回の第8番のノクターンはノクターンとしての存在感が薄く、もう少し特徴のある曲を

選んで欲しかった。長い連符が数多く現れるが、連符の終わり辺りを巻いてしまうなど、演奏上にも問題が散見した。とは言え、協奏曲第7番は、研究の集大成にふさわしい、力が入った演奏であり、特に第2楽章は聴きごたえのある素晴らしい演奏であった。フィールドの協奏曲にはピアノ2台用の楽譜は存在せず、毎回のリサイタルで取り上げた協奏曲のピアノ伴奏譜は全て自ら譜面を起こし作成してきた。彼女の伴奏譜はよく吟味されており、この楽譜だけをとっても、後に続く学習者にとっては非常に価値のあるものと思われる。

彼女はピアニストとしての力は十分に備えており、今後活発な演奏活動を通して、再びピアニストのレパートリーになり得るフィールド作品の価値を再認識させてくれることを大いに期待している。

2. 論文審査

本研究はジョン・フィールドのピアノ協奏曲を扱ったもので、とりわけピアノ協奏曲全7曲の全楽章を対象に、ピアノとオーケストラの関係略図を提示し、1. 形式、2. 旋律、3. 拍子とテンポ、4. 調性、5. 楽器、の5つの観点から詳細な分析を施した上で、2楽章形式とノクターン様式に絞って、フィールドの特徴を考察している。

その結果、ピアノ協奏曲のみならずフィールドの作品には2楽章形式へのこだわりが見られ、2楽章形式の使用はロンドンの伝統と思われること、ノクターン様式は終楽章には認められず、第1楽章よりも緩徐楽章の方こそ関わりが深いこと、ノクターンの作曲とピアノ協奏曲の作曲は彼の中で相互に影響し合って発展し、2楽章形式とノクターン様式が融合された第7番こそ彼の到達点であったことが明らかにされた。

こうした19世紀初頭の初期ロマン派音楽の本格的な研究は始まったばかりで、ピアノ協奏曲に関してはオーケストラの総譜もほとんど出版されていない現状がある。フィールドのピアノ協奏曲を扱った先行研究も修士論文1点と博士論文1点があるだけで、研究が十分になされてこなかった状況があり、テーマとして取り上げる意義は認めてよいだろう。この研究では、改訂や編曲が多く、成立過程の複雑なフィールドの作品を細かく丁寧に紹介し、詳細な楽曲分析が施されている。その点は評価してよいだろう。しかしながら一体楽曲分析にはどのような意味があり、何を導き出そうとしているのかが曖昧で、分析の羅列に終始した感も否めない。またフィールドだけを扱うのではなく、古典派からロマン派にかけてのピアノ協奏曲作品にももう少し視野を広げ、歴史の全貌の中からフィールドを位置付けてほしかったとの意見や、ノクターン様式の発展にはピアノという楽器の発展と不可分の関係にあり、低音を持続できるダンパーペダル成立など今後の課題として楽器学上の変遷過程からも検討を加えてほしいとの要望もあった。

そうした点では不満も残るが、審査委員会としてはこの論文がなによりも細やかなところまで目の行き届いた丁寧な研究で努力のあとが窺えること、そして今後この分野を研究しようとする者に大いに寄与するであろうこと、また博士後期課程在学中に3回実施されたりサイタルでもフィールドのピアノ作品を取り上げて実践面からも研究を進めてきたことから、もう十分であろうとの判断に至った。

3. 総合審査

以上の演奏審査と論文審査を総合判断し、この研究は今後この分野を研究しようとするものに十分寄与するであろうことから、全員一致で「博士（音楽） Doctor of Musical Arts」の学位を授与するに値するものと判定された。